

第5学年 国語科学習指導案

書式は学校の指定に合わせて調整してお使いください。

日 時 令和 年 月 日 () 第 校時
場 所
指導者

1 単元名

「敬語」 教材名「敬語」

2 単元の目標

日常よく使われる敬語を理解し使い慣れることができる。（〔知識及び技能〕(1)キ）

相手や場に合う敬語を選び、同じ内容の伝え方を比べる学習の中で、言葉への関心をもち、自分の取り組みを見直そうとする。

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①日常よく使われる敬語を理解し使い慣れている。（〔知識及び技能〕(1)キ）	①この教材単独では記録に残す評価を行わず、関連する言語活動の単元で見取る。	①相手や場に合う敬語を選び、同じ内容の伝え方を比べる学習に進んで取り組み、友達の反応や自分の記録を確かめながら、言葉の使い方や捉え方を見直そうとしている。

4 指導上の考察

（1）単元について

相手や場に合う敬語を選び、同じ内容の伝え方を比べる。この教材では、相手・場面・動作主と言葉遣いを対応させた記録を残し、言葉をどう使ったか、どう捉えたかが分かるようにする。公式年間計画は知識・技能に重点を置く短い教材としている。本案でも本時は知①を中心に記録し、思考・判断・表現をこの教材だけで独立して評定する扱いにはしない。

（2）児童について

（学級の子どもの様子を先生が書く）

（3）指導について

教師作成の学校生活の場面で、だれの動作を述べるかを確認してから言葉を選ぶ。過剰に改まった言い方を求めず、敬意が伝わるかを聞き手と確かめる。想定する難しさは、すべての語に「お」を付ける、自分の動作に相手を高める言い方を使う。評価では、日常よく使われる敬語を理解し使い慣れているかを、相手・場面・動作主と言葉遣いを対応させた記録と活動中の発言・操作から確かめる。作品の量や見た目、発言の回数だけで判断しない。

5 指導と評価の計画（全2時間）

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○相手と話す目的を確かめ、聞いて知りたいことや話す材料を出す。教師作成の学校生活の場面で相手と動作主を確かめ、敬語の言い方を比べる。	学習状況を見て支援する。
第2次	2 （本時）	○教師作成の学校生活の場面で相手と動作主を確かめ、敬語の言い方を比べる。お願いや説明を相手役へ話し、敬意と内容が伝わったかを聞いて言い直す。対象の言葉や文字をもう一度使い、確かめたことが別の例でも生かせるかを試す。	知①（発言・活動中の記録・作成物）



6 本時の指導 (2/2)

(1) 本時の目標

日常よく使われる敬語を理解し使い慣れることができる。（〔知識及び技能〕(1)キ）

(2) 学習過程

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
導入 (分)	相手と話す目的を確かめ、聞いて知りたいことや話す材料を出す。 ○「だれの行動を、どの相手に伝える言い方ですか」 【めあて】相手や場に合う敬語を選び、同じ内容の伝え方を比べる。 〈予想される児童の反応〉 ・同じお願いでも相手に合わせて言い方を変えたい。	最初の言い方や記録を残し、授業後の考えと比べられるようにする。正答を先に示さず、扱う言葉と課題を確認する。
展開 (分)	○「だれの行動を、どの相手に伝える言い方ですか」 教師作成の学校生活の場面で相手と動作主を確かめ、敬語の言い方を比べる。お願いや説明を相手役へ話し、敬意と内容が伝わったかを聞いて言い直す。 対象の言葉や文字をもう一度使い、確かめたことが別の例でも生かせるかを試す。 〈予想される児童の反応〉 ・同じお願いでも相手に合わせて言い方を変えたい。 ・丁寧にするだけでなく、だれの動作か確かめたい。	教師作成の学校生活の場面で、だれの動作を述べるかを確認してから言葉を選ぶ。過剰に改まった言い方を求めず、敬意が伝わるかを聞き手と確かめる。 想定する難しさ：すべての語に「お」を付ける、自分の動作に相手を高める言い方を使う。 評価では、日常よく使われる敬語を理解し使い慣れているかを、相手・場面・動作主と言葉遣いを対応させた記録と活動中の発言・操作から確かめる。作品の量や見た目、発言の回数だけで判断しない。 ◎知① 日常よく使われる敬語を理解し使い慣れている。（発言・活動中の記録・作成物）
まとめ (分)	【まとめ】問いへの答えを、今日確かめた言葉や表現を含めて話す。 相手・場面・動作主と言葉遣いを対応させた記録を見返し、初めと変わった点や、そのまま残した理由を確かめる。 〈予想される児童の反応〉 ・丁寧にするだけでなく、だれの動作か確かめたい。	教師のまとめを写すだけにせず、本人が選んだ言葉と理由を確かめる。態度は本時だけで決めず、単元を通した取り組みと調整の記録を合わせて判断する。 ◎態①（最初と最後の記録、見直しの理由）

(3) 板書計画（縦書き・右から左へ）

縦書きで、右から左へ学習の流れを配置する。右端に題名とめあて、その左に問い「だれの行動を、どの相手に伝える言い方ですか」。中央は、相手・場面・動作主と言葉遣いを対応させた記録に必要な言葉・材料と、考えた理由を対応させる。本文を扱う場合は先生が手元の教科書から必要な範囲を示す。左側に比べて気付いた点と見直した箇所、左端に本時で確かめたことを置く。

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」 (@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

